

イギリスのインド支配

イギリスの東方・東インド進出・侵略・植民地拡大 参考：角川『世界史辞典』ほか

16世紀後半―17世紀末・・・スペイン・ポルトガル（カトリック）に対抗する

イギリス・オランダ（プロテスタント）

オランダのスペインからの独立（運動→戦争）、

オランダを支援するイギリスとスペインの海戦・・・イギリスによる無敵艦隊の撃破

1600年末、**東インド会社**：エリザベス一世より特許状を下付され発足。

オランダも16世紀末に存在した多数の貿易会社を統合して1602年に**連合東インド会社**

オランダ・イギリスの**世界商業覇権**をめぐる戦争（**重商主義戦争**）

第一次（1652―55）…イギリス勝利

第二次（1665―67）…イギリスによるオランダ領アメリカ植民地侵略…ニューアムステルダム（1626、オランダが先住民から**マンハッタン島**を購入して建設。ニューネザールランド植民地の中心として栄えた）を64年イギリスが占領。イギリス領に（**ニューヨーク**）。

第三次（1672―74）…フランスのルイ14世のオランダ侵略にイギリスのチャールズ2世が加担。財政難からウェストミンスター条約でイギリス戦線離脱。

3度の戦争を通じてオランダは後退し、**英仏対抗の時代**に入った。

スペイン継承戦争（1701―1714）…スペイン王位の継承をめぐる**英仏対抗・戦争**。

アン女王戦争（1702 - 13）…北アメリカ、西インド諸島における**英仏の植民地争奪戦争**。

オーストリア継承戦争（1740―48）…ハプスブルク家の王位と領土の継承をめぐる争われた戦争。**イギリス・オーストリア 対 フランス・プロイセン**

シュレージエンをめぐるプロイセン 対 オーストリア

植民地をめぐる英仏間の争い

工業地域シュレージエンは戦争の結果、プロイセンの領土に。

七年戦争（1756―63）…一方における**フランス、ロシア、オーストリア**

他方における**イギリス、プロイセン**

シュレージエン奪還を目指すオーストリア（マリア・テレジア）は、それまでの宿敵フランスと同盟を締結した（1756年、外交革命）

プロイセンはイギリスの援助を受け、フランス・オーストリア同盟の機先を制してザクセンに侵入、予防戦争に訴えた。プロイセン、一時窮地に。

しかし、62年ロシアのエリザヴェータ女帝の史により、ロシアはプロイセンと同盟を締結。英仏植民地戦争におけるフランスの敗北もあって、戦

局はプロイセン有利に。プロイセンのシュレージエン領有確定。

プラッシーの戦い…1757 インド・ムガル帝国のベンガル太守（ナワーブ）とイギリス**東インド会社軍**との間で戦われた戦争。七年戦争の一環をなすもので、イギリスはこの戦争でベンガル太守とその後ろ盾となったフランスを破り、**インドにおける優勢を確立**した。イギリス**東インド会社**はベンガルなどを領有し、貿易会社より植民地支配者となった。

この戦いの後フランスは、**インドシナに進出**の方向を求めることとなった。

アメリカ独立革命（1765年印紙法一揆…独立戦争…88年アメリカ合衆国憲法成立にいたる人民主権体制確立の過程）

重商主義戦争の重圧・財政負担・・・**フランス革命**勃発

イギリスは産業革命。

18世紀末ころから、東インド会社の貿易独占（特許）に対する批判の勢力の増大。

・・・自由貿易主義・・・「世界の工場」。

インド統治には、直接、イギリスの政府が乗り出す。…**インド統治法**（イギリス議会による制定）

1773年の東インド会社規制法（会社を明確な法的規制下に置いた）

1813年、1833年特許状

インド総督…1833年－1947年

インド大反乱…1857年5月10日勃発の反英反乱・・・58年までにほぼ鎮圧。

セポイ（インド人傭兵、シバーヒー）の反乱から始まったが、反乱参加者は領主層や農民にまで広範に及ぶ。

乱後、ムガル皇帝は廃され、東インド会社も解散させられ、インドはイギリスの直轄植民地に（実質的なイギリス国王による直接支配）。

イギリスの**ヴィクトリア女王がインド帝国（1877年成立）の皇帝**に。

インド総督は副王とも呼ばれることに。